

長野県内キヨズミオオクジャクの新産地報告

竹重 聡*

はじめに

2009年3月15日、童謡作家中山晋平の出身地である中野市間山地区、温泉付近のスギ林を観察した。付近一帯の地形は広範囲な扇状地を形成し、林床は腐葉土交じりの赤土粘土層に覆われていた。スギ林の隙間をリョウメンシダが埋めつくし、湧水と思われる沢水が流れる北西向き斜面を中心に歩いた。この斜面でアイアスカイノデとイノデとキヨズミオオクジャク（岩月邦男 1992）らしき3株を確認し、岡武利氏に同定をお願いしたところ3株は初夏の新葉待ちとなった。

2009年6月28日、この年の新葉を岡武利氏に再同定していただきキヨズミオオクジャクであることを確認した（標本未登録）。

キヨズミオオクジャクは県内では下条村内で、また1985年大北地域の小谷村で、そして1998年阿南町で発見例があるがこれまで正式な報告例はなく、長野県植物誌にも記載がなかった（信濃毎日新聞朝刊2009・中日新聞朝刊2009）。このため長野県内キヨズミオオクジャクの新産地報告（写真1）とした。

キヨズミオオクジャクについて

キヨズミオオクジャクは常緑性の暖地性シダで、日本のシダ植物4（倉田悟・中池敏之 1992）で1980年台前半までの新産地報告国内北限は、石川県氷見から七尾付近の五箇所の報告（1975～1980）が最北限である。同緯度付近の他県報告は富山県上市町（1976）、群馬県富岡市（1980）、茨城県七会村（1976）が新産地の北限である。この緯度線上の中野市（2009）新産地はだいたい氷見付近に当たり最北限に近いものである。

本シダは、「葉柄および葉軸の鱗片が黒色を呈し硬く宿存し、ソーラスは羽片の片縁と羽軸の中間あるいはむしろ羽軸寄りに配列し、また、葉面のほぼ中央部が最大幅を有し、下部羽片はあまり縮小しない等の性質にてイワヘゴと近似しているが、葉軸中・下部の鱗片の辺縁に刺状突起がほとんど出ないこと

と、葉脈が葉の上面で顕著に凹入する性質は、まったくオオクジャクシダに一致する。しかるにオオクジャクシダ自身、鱗片は淡褐色から黒褐色までの変異があり、また、ソーラスは通常辺縁寄りに生ずるとしても、かなり羽軸寄りにほぼ羽片の辺縁と羽軸との中間に配列する場合がある。胞子の形成は良好である」とある（倉田悟 1955）。



写真1 特徴である鱗片 上 春の新芽 下

考察

わたしの観察でキヨズミオオクジャクの鱗片は、葉軸下部から葉柄に下がるに従い鱗片の長さの下半分辺縁に刺状突起が目立って出る。鱗片は一樣にねじれ、艶のある黒一色に見えるがその先端色は付け根にかけて薄い透き通るような茶褐色から次第に濃くなり、基部は艶のある黒褐色となる。またイワヘゴは全縁に刺状突起が出て黒褐色で根元はさらに黒色、オオクジャクシダは突起が出ない薄茶色か茶褐色である。

春の新葉の出芽形状はオシダ科キヨズミオオクジャクとイノデ類は双方異なるので判断できる。またキヨズミオオクジャク、イワヘゴ、オオクジャクシダの出芽形状は同じである。オオクジャクシダは、

* 竹重 聡 〒381-2246 長野市丹波島2丁目16番地3

県内の出現頻度が全県で見られる。また葉身の色はキヨズミオオクジャク、イワヘゴより黄緑色か黄色っぽい。最下羽片はイワヘゴと同じく中央部の半長ほどに短縮、さらにイワヘゴは最下羽片の短縮が葉柄に向かって下に垂れる形で幅を狭くし、キヨズミオオクジャクの最下羽片はあまり短縮しない、下に垂れないことが特徴（池畑怜伸 2006）であることを確認した。

なぜ中野市間山地区で新産地なのか。斜面上の株一つが親株であり、20m 程下の 2 株はその実生だと考える。親株がスギの木の根元付近で発見されたため、雪の多い地域のスギの植林は、中野市付近なら雪害を受けない等の理由から、日本海側多雪地域杉林の幼苗を受け入れた植林により付着していた孢子から前葉体が発芽したのか（竹重聡 2009）。獣等の移動による飛散、食害の糞によるものか。また偏西風、季節風により飛散した孢子がスギ花粉とともに上空を飛んできて着地したのか。わたしは後者の大陸からの風が起因、そして鳥の飛来とその糞も含めて当地の環境好条件斜面で前葉体が発芽したと考える。当地で暖地のシダのキヨズミオオクジャク、アイアスカイノデ、イノデは確認したが、その他のイワヘゴ、カタイノデ、サイゴクイノデ、イノデモドキは未確認である。イワヘゴは 2005 年まで北信地域で報告例がなく、2006 年 12 月長野市若穂で 14 株、同時にカタイノデ 120 株を新産地報告済みである（竹重聡 2009）

須坂寄りの長野市、高山村、小布施町、中野市の千曲川右岸で暖地のシダが続けて確認されたこと

は、自生の状況等から見てほぼ温暖化の影響と考えてよいという結論に至った。今後も人と希少シダ植物・希少種子植物との偶然の出会い、過去の県内のいろいろなシダとの出会いを振り返れば、益々続くと考えられる。北信多雪地域のスギ林のシダ調査をこれからも継続予定である。

謝辞

キヨズミオオクジャクの同定では、日本シダの会員岡武利氏から詳細なご教示有徳な助言を賜り心から感謝の意を表します。あらためてお礼申し上げます。

参考文献

- 岩槻邦男（1992）日本の野生植物 シダ 平凡社 東京：PL113 187
- 信濃毎日新聞朝刊（2009. 9.4）温暖化影響か、希少シダ発見中野.：35 面
- 中日新聞朝刊（2009.9.14.）暖地性シダ、中野の杉林で確認、今後に注目：14 面
- 倉田悟・中池敏之編（1985）日本のシダ植物図鑑 4 東京大学出版社. 東京：522-526
- 竹重聡（2009）千曲川右岸スギ林のシダ新産地の環境特性 長野県植物研究会誌 42：51-62
- 池畑怜伸（2006）写真でわかるシダ図鑑 トンボ出版 大阪：101-102